観光客誘致、地域振興へどう生かす

山形県新庄市で毎年8月24～26日に開かれる「新庄まつり」は宝暦6年（1756年）から263年続く同県で最も歴史ある祭りで、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の無形文化遺産にも「日本の山・鉾・屋台行事」の一つとして登録されている。しかし、その歴史や魅力に比べて一般の知名度は決して高くなく、地元では祭りを活用した地域活性化が課題となっている。新庄藩を題材にした時代小説を執筆する作家の今村翔吾氏と地元関係者ら5氏にお集まりいただき、今後の方向性を語ってもらった。

ＪＲ新庄駅の構内に展示された山車をバックに

「祭りそのものが故郷」

今村

今村氏

――（司会）はじめに、直近の直木賞候補となった今村翔吾さんに話を聞きたい。今村さんは新庄藩を題材にした作品を執筆されている。新庄にも数多く足を運び、祭りにも参加されたという。今村さんから見た新庄まつりはどのようなものか。

今村　私は小説家になる前はダンスの講師をしていた。東日本大震災が起きた直後から50回以上東北を訪ねて、ダンスを教えたり、イベントで踊ったりと、被災地支援の活動をしていた。その一環で新庄を訪ねたこともあった。

元々歴史が好きで、新庄の歴史にも以前から興味を持っていた。火消しをテーマに小説を書くことなり、江戸時代の新庄藩のことも調べた。当時、江戸城を守る「方角火消し」という大名の職務があり、通常は4年程度で交代するのだが、新庄藩は14年もその任務に当たっていた。当時300ほど大名がいたのに、官位をもらっていないのも新庄藩だけ。そんなことも気になっていた。

祭りも以前から話は聞いていたが、現地でポスターを見て、その華やかさにさらに興味を持ち、成り立ちなどを資料を取り寄せて調べた。

新庄藩の5代藩主、戸沢正諶（まさのぶ）公は、地域の住民を勇気づけるためにこの祭りを始めたという。当時、宝暦の飢饉があり、藩の人口が2分の1になった。飢饉のあと、普通は町の復興にお金をかけるのだが、正諶公は人々の心の立て直しが急務であると、この祭りを始めたようだ。

震災以後、東北を回って感じたのは、いくら物資が集まっても、人の気持ちがなかなか回復しないこと。「働く気が起きない」という話も聞いた。正諶公が祭りを始めた気持ちがよく分かる。

新庄まつりには、昨年初めて参加した。京都出身者として感じたのは、「若い世代は祇園祭より好むだろうな」ということと、祭りのために地元に戻ることの素晴らしさ。もはや祭りそのものが故郷になっている。こういう祭りは、意外とない。近いものは大阪の「だんじり」。関西人の私から見て、普段はおとなしく見える東北の人々も、祭りでは元気で明るくなる。300年にもなろうという祭りだが、伝統をうまく受け継いでいると感じた。

祭りの魅力と比較して、地元以外での認知度はまだまだ低い。実際、私の地元の仲間も知らなかった。そこで昨年、仲間数人を誘って参加したのだが、みんな感動していた。もっと知られてほしい祭りだ。

――全国で祭りは一大産業になっており、東北にも数多くの祭りがある。東北の観光と祭りの現状は。

紺野　リーマンショックと東日本大震災以降、国内全体でインバウンド旅行者が増加している。ただ、東北の場合、元々海外との直行便が極めて少なく、取り残されていると言っていい地域だった。震災前の東北全体の宿泊者数が50万4500人程度。ただ、この2、3年は徐々に目を向けられるようになり、一昨年は97万4千人まで数字を伸ばした。

東北観光の主たるマーケットは、新幹線開業時は首都圏だった。昭和57年に東北新幹線が盛岡まで開業。その後平成4年に山形新幹線が開業し、平成7年に新庄まで延伸した。新幹線の開業で、首都圏から東北は劇的に近くなった。

東北は域内の観光流動が多い。東北には温泉や伝統行事など、地域に根差した多くの魅力とポテンシャルを秘めている。新幹線開業後、他の地域の方々にも東北の観光魅力について周知され、たくさんの観光客に来ていただいていた。だが、東日本大震災発生以後、激減した。

東北は震災からの復旧・復興に加え、人口減少、少子高齢化が課題だ。そうした中で、観光の果たす役割は大きい。

東北に旅行者が多く来るのは10月の紅葉の時期。次いで3、4月の桜の時期。だが、エネルギーを一番感じられるのは夏祭りの時期ではないか。

東北は春夏秋冬がはっきりして、日本の風情を最も感じられる地域だ。四季を通じて魅力があるが、今後は夏を中心に祭りを核とした情報発信にも力を入れて取り組まなければならない。

――青森のねぶた祭など、運営的に成功している祭りがある。旅行商品を企画造成する旅行会社の立場から、新庄まつりについて思うことは。

野崎　観光に対する人々の考えが変わっている。ハコものに行って何かを見る「疑似体験」から「ほんもの体験」へとシフトしている。

特に祭りへの参加は人気が高まっている。弊社グループの前年の送客数を見ると、青森ねぶた祭が9910人、秋田竿灯まつりが6980人。

ただ、新庄まつりは170人となっている。これが現実だ。しかし、この数字は祭りのポテンシャルを表しているとは到底思えない。

祭りは今村先生も指摘されたように、人の心を奮い立たせるもの。その点、ねぶたも竿燈も新庄まつりも変わらない。むしろ歴史的には新庄まつりが圧倒的だ。

何が違うのかを考えると、「見せ場」があるかどうか。ねぶたは参加者全員が懸命に踊り、声を出すシーンが見る側の記憶に残る。竿燈まつりも同様に見せ場がある。新庄まつりも見せ場はあるのだろうが、見る人に響いていないように感じる。

外に見せることをもっと意識すべきだ。見られることは参加者にとってうれしいはずだ。見られることにもっと意識を向けてほしい。

鈴木氏

「本まつり」では2㌔にわたる山車行列が1日かけて市内を練り歩く

祭りに合わせ仕掛けを
周辺エリアと連携提案

鈴木　**井上**

――地元新庄駅の鈴木駅長はどう感じているか。

鈴木　新庄は昨年8月に豪雨被害を受けた。しかし、祭りは通常通りの開催で、大成功となった。

私は隣県の福島出身で、新庄まつりについて知識はあまりなかった。しかし実際に見てみると、ねぶたにも匹敵する素晴らしい祭りだと感じた。

地元の祭りに各地から来てもらえるのは、地元の人間にとってうれしいことだ。野崎さんの話にもあったが、自分たちが楽しみつつも、人に見せる、見てもらいたいという気持ちを少しでも持つことが大事だ。

新庄まつりは曜日によらず、8月24～26日と、毎年決まった日にちに行われている。関連イベントを週末に開催するなど、何かの仕掛けも必要ではないか。3日間の祭りだけではもったいない。

――JRは祭りに合わせて新幹線や在来線の臨時列車を運行している。われわれは宮城や福島など、広いエリアからの集客にもっと関心を持たねばならない。プロモーションに力を入れ、東北全域、そして首都圏、全国からも足を運んでもらうよう努力する。

――祭りの実行委員長でもある井上会頭（新庄信用金庫理事長）はどう考えているか。

井上　今日の出席者で新庄生まれは私だけ。新幹線が新庄に延伸したころ、故郷に戻ってきた。

全国でさまざまな祭りを見てきたが、新庄まつりはユネスコ登録の祭りの中で一番住民のエネルギーが感じられる祭りだ。しかし、その魅力が広く知れ渡っていないことが残念だ。新庄から出掛ける旅行商品はあるが、新庄着の商品がないことが一因だ。われわれの新庄信用金庫で旅行会社をやろうと冗談半分で考えたこともあった。全国から集客できる体制が必要だ。

山形県の旅行ガイドブックは新庄・最上エリアのページが一番少ない。地元からの情報発信が少ないことが理由の一つだ。実行委員会として、祭りについてしっかりと情報発信できる体制をつくらなければならない。

新庄まつりの特徴は、毎年ゼロからテーマを考えて山車（やたい）を作る点。2月に20町内全てが集まり、その年のテーマを決める。そこから祭りが始まるといっていい。山車の製作過程など、祭りの準備段階もアピールできるのではないか。

周辺町村含め、祭りが開催される3日間全て学校が休みになるのも特徴だ。祭りの時期に出身者は地元に帰ってくる。祭りはある意味、地域の魂のようなところがある。

祭りは過去、東京の大銀座まつりや沖縄のイベントに呼ばれたことがある。外部からの評価はかなり高いと思う。しかし、域内への経済効果はまだまだだ。

新庄エリアには宿泊施設が少ない。しかし、周辺には多くの温泉地がある。祭り初日の24日に周辺温泉地に宿泊し、25日に「本まつり」を見てもらうプランが考えられる。天童温泉の旅館経営者には既に提案している。

24日の「宵まつり」は山車がライトアップされることから3日間の中で特に人気が高い。その効果をあとの2日間にも持続させなければならない。25日の本まつりは古式ゆかしい神輿（みこし）渡御もあり、一番の見せ場だと思っている。また、26日の「後まつり」も20台の山車が並び、お囃子（はやし）が演奏されるなど壮観だ。祭り全体の魅力を周辺の宿泊施設と連携してアピールする必要がある。併せて、見ていただくためのインフラを整備しなければならない。

今村　新庄まつりを初めて見て感じたのは、山車を一度に全て見たかったということ。次々に通り過ぎてしまい、いい面がある一方、もったいないと感じた。駅前で一斉に見られるなどの仕掛けがあれば、また違った感動が生まれると思う。そしてフィナーレなどの仕掛けもあればいい。

野崎氏